

濡れ落葉はゴメンだ！ たなか踏基

私は目下大学同窓会の理事を拝命している。高校や大学の同窓会、会社OB会等というものは、悠々自適という美名の精神的老境に入っているか、生甲斐を無くし人生の緊迫感を欠いているか、そう言った類の人が群れて、単に昔を懐かしむ仲良俱樂部に過ぎないと、半ば軽蔑してきた。同窓会役員を引受けるのは、閑職に居る人のすることと避けてきたのも事実である。「やお前か！」と学校や会社卒業後に当時の仲間に出逢つて、旧交を温めたくなる心境も決して解らないではない。少なくとも今は、自分の弱さを曝け出すのは厭だ。張つたりでも良いから、群れずに一人でも毅然として生きていたい。と若い時思つていた私が、何故か大学同窓会の支部長を三期、全国理事を七期、勤めているのだから自分でも不思議と言えば不思議である。

高校の同窓会は、全く不義理をしている。高校を一年間休学したので、自ずと皆と疎遠になつたからである。高校創立百三十周年記念を迎えるとかで、先日も実行委員会から同窓会会報と募金趣意書が送付されてきた。友に誘われ同窓会に一、二度出席したこともあるが、卒業後の私の交際範囲は狭く、会話は弾まなかつた。私の親交は専ら、同窓会とは疎遠な人種芸術畑の友であつた。今では、彫刻家と声楽家の二人は既に他界、後輩の一人は貧乏画家のままである。休学仲間唯一人異色は、某大手監査法人理事長に成つた友が居る。

この友人との共通項はジャズであつた。

友人は休学時にトランペットを、私はクラリネットを覚えた。当時のドイツ映画「朝な夕なに」を觀て二人共感動した。特に心に残り惹かれたシーンは、生徒達で結成されたジャズ・バンドの仲間が病気で亡くなり、葬儀に参列してお墓の前で演奏するカットだつた。

主題の「真夜中のトランペット」が墓地に鳴り響く哀調の旋律は、休学中の二人の胸を熱くさせた。友は早速EP版レコードを入手し、この曲をコピーして吹いた。文化祭の余興に、飛び入りの即席バンドで二人で演奏した記憶がある。校章とんぼの由来から「とんぼ祭」と呼ばれる学園祭だつた。この「真夜中のトランペット」(ベルト・ケンプフェルト楽団、トランペットビリー・モー)は当時ヒットした。かように、高校時代の同窓生と疎遠なのは、多感な青春時代の一種の見栄と休学の負い目が災いし、胸襟を開いて仲間飛び込む勇気が無いからである。その後、この友は早稲田の政経学部に進学、互いに部活はジャズの世界に身を置いた。友はモダンジャズの、私はスイングジャズのバンドで活躍した。今でも年賀状を交わす高校の友人は、数名と少ないままである。

一方、私の大学時代の友人は多い方である。軽音楽倶楽部のジャズの演奏活動を通じて、公の場に姿を晒していたので、先方から声を掛けてくる友人も居るからで、高校時代と異なり友人には恵まれてきた。そんな環境下、四十歳代の頃から、仕事上の人脈作りで会合にも良く顔を出した。私を更に同窓会活動に駆り立てるのは、大学独立法人化の動きが始ま

る三年前である。文部科学省の方針で、平成十六年四月一日より、国立大学が一齐に独立法人となつた。国立大学の教師や職員は、国家公務員でなくなった。大学は今、文科省からの予算削減で、嫌でも私立大学のな経営感覚と組織変革を迫られている。一方で卒業生の組織化も盛んになり、同窓会と母校の連携強化の動きが活発化している。従来懐かしさに頼るだけの活動では済まされなくなつたからだ。おまけに母校の科学技術交流を大儀にした、同窓会館建設の寄付金募集の実行委員に任命された。後輩に同窓会の役員職を譲りたいと思つていた矢先、のつびきならない羽目に陥つた。全く国公立の先生達は、長年自分で銭を稼ぐことを知らずに来たから、何かと言うと同窓生の寄付金や企業の協賛金を充てにする。この悪習を捨て切れない。この思考回路は全く困りものだ。唯学生のリクルー卜目的だけで、企業がお目当ての研究室に科研費を貢いできた弊害でもある。ある面、企業側やOBの思惑が、特に理系の先生を増長させ慢心させたと言つても過言ではない。

大学同窓会活動のお陰で、幸い呆けしないで済む。他にベンチャー創業、自作ホームページ管理、小説と随想の雑文執筆、健康保持の趣味の社交ダンスとスポーツ倶楽部の水泳・・・これで結構楽しい毎日である。大学の同窓の仲間から「良いなーお前は毎日が日曜日な感じで・・・」と羨やまれる。吾が六十歳代は、自分でも結構充実した人生だと自認している。この先も濡れ落葉に成る事だけはゴメンダ。